

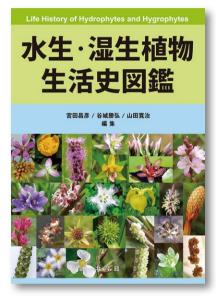
書評•新刊紹介

宮田昌彦・谷城勝弘・山田寛治 編

水生 · 湿生植物生活史図鑑

いまから三十数年前,500余種の藻類について生活史を網 羅した、三巻からなる図説書が刊行されたことがあった。筑 波大学生物科学系の教授だった堀輝三先生(1938-2006)が 内田老鶴圃から上梓した『藻類の生活史集成第2巻 褐藻・紅 藻類』(1993), 『同第1巻 緑藻類』(1994), 『同第3巻 単細 胞性・鞭毛藻類』(1994) である。これら三巻は生活史の図 説として企画されながら、広範囲の分類群について各ステー ジが詳細に図解された生活環(生活史の両端を繋いで輪にし たもの)と分類から利用まで多彩な情報とを掲載していたこ とから、実は藻類の同定にも便利で、現在も藻類図鑑として も重宝されている。当時、部下として出版のお手伝いをして いた筆者は、堀先生から陸上植物の生活史を集めた第4巻の 構想を打ち明けられたが、その計画は、先生の研究の重心がイ チョウ学へ移り、退職後まもなくして逝去されて実現にいたら なかった。今夏、この『水生・湿生植物生活史図鑑』を手にし、 その高い網羅性に、かつて堀先生が構想した植物全グループの 生活史集成が三十年越しに実現したのを目にした思いである。

本書が対象とする生物の範囲は広い。その編集方針は冒頭 から革新的で、従来の図鑑であれば狭義の水草(抽水植物、 沈水植物, 浮葉植物, 浮遊植物) のみで纏めたくなるところ, 序文から現代日本の植物多様性保全に対応させることを見据 えた生態学的な水草の再定義が試みられ、「水生植物、不完全 湿性植物、水生のコケ植物、大型藻類」を広義の水草として いる。そのあたりの議論は、生育環境の分類と併せて第1章 の概論で深められる。その結果、本編となる第2章で534頁 にわたって取り上げられる多細胞性光合成生物は,裸子植物(2 種), 被子植物(416種), 大葉シダ植物(16種), 小葉植物(1 種), コケ植物(5種), 車軸藻植物(13種), 地衣類(3種) の 456 種に達する。実際、最初に登場するのはヒノキ科の樹 木(スイショウ)であり、最後は海岸性地衣類(ウシオイボ ゴケ)で終わる。各種1頁に全形だけでなく、花や果実や胞 子などを押さえたカラー図版と生態, 生育形, 形態, 生活史, 分布、語源、漢名、民俗などの情報が記載され、主要な種に ついては1頁追加して生活環を図示している。この生活環と 季節性の図表がその植物の生き方を理解するのに不可欠なの は言うまでもないが、あえて言っておきたい。第3章では絶 滅危惧種の基本知識や水草生育地での保全活動の実践例など に加え、水草60数種の育て方まで解説されている。また、随 所に挿入された8つのコラムも、水草研究の歴史からシャジ クモ科の分類形質まで興味深く, 読み応えがある。



北隆館

B5 判 617ページ (オールカラー)

2025年7月10日

定価: 22,000 円 (本体 20,000 円+税)

ISBN: 978-4-8326-1062-0

編集・執筆者の1人、宮田昌彦先生は、「昆明・モントリオー ル世界生物多様性枠組」(2022) の行動目標である「30 by 30」 すなわち、『2030年までに陸域、陸水域並びに沿岸域及び海域 の少なくとも30%の保全を達成する』とした目標達成の一助 となることを目指したという(序文より)。こうした狙いで企画 された本書の最大の特徴は、やはり敢えて『水草生活史図鑑』 とせず、日本の水辺に現れる植物すべて、樹から藻までを掲載 対象にしたことと思われる。この 1 冊があれば現地調査で目に した植物の見当がつけられる(唯一惜しまれるのは,海草はあっ て海藻がないことか)。これは実際に総合的な植物相調査や生 態調査を行ってきた研究者の発想である。宮田先生(ご専門は 海藻のはず)は千葉県立中央博物館で植物研究科長や分館海の 博物館の館長を歴任され、2020年には『日本海草図譜』を出 版 (参照: 藻類 69 巻 108-109 頁) されている。 そうした広い フィールドでの活躍のご経験が、この実用的で美しい図鑑の実 現を可能にしたのだろう。水辺で植物調査を予定するすべての 研究者にお薦めの1冊(必携と言いたいところだが、重い)。

北山 太樹(国立科学博物館)